

芸大通信 .

2007年度春・Vol.008
2006年度 主な活動の記録
京都市立芸術大学広報誌



京都市立芸術大学では、2006年10月に「京都国際会議2006」を開催いたしました。世界情勢が近年とみに緊迫し、中東、アジアにはなお戦火が止みません。こうした中で芸術が目指す平和の価値を全世界的に認識しなおすことが求められています。本会議は、そのような意図で立案され、「芸術がデザインする平和のかたち」を主題として、多くの芸術家や研究者が集い、広く意見交換する場として行われました。オープニングシンポジウムでは、9・11を主題とした小説で大佛次郎賞に輝いたリービ英雄氏の基調講演に続いて、パネルディスカッションを催しました。美術学部では、国際的に活躍するミハ・ウルマン氏と本学教員の中ハシクシゲ氏の両作家を招聘し、ワークショップやシンポジウムを通じてアートと平和の問題を考えました。音楽学部では、パレスチナのニザール・ロハナ氏やウクライナのオクサーナ・ステパニク氏、本学教員・学生による「愛と平和を祈るコンサートシリーズ」のほか、シンポジウム等を開催。また、日本伝統音楽研究センターでは、平和によって保存されてきた声明や、アメリカから招いたボニー・ウェイド氏の民族音楽に関する講演等を通じて、音楽と平和のテーマを追求しました。



オープニングシンポジウム 基調講演：リービ英雄 パネリスト：片倉もとこ(国際日本文化研究センター所長) 尾池和夫(京都大学総長) 中西進(京都市立芸術大学前学長)



京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品展「仏画一祈りの図像」



公演「黄檗の声明(梵唄)」黄檗山萬福寺



展覧・ワークショップ「日本伝統音楽研究センター所蔵田邊コレクションの楽器」



講演「音楽の知そして平和」講師：ボニー・ウェイド

芸術がデザインする平和のかたち

京都国際会議2006 —芸術と平和に関する宣言—

20世紀は戦争の世紀でした。21世紀に入り、こうした状況を阻止するために、芸術の立場から何が可能であるかを模索することが今回の会議の目的でありました。芸術は、時代の息苦しさや表現への抑圧に対してもっとも鋭敏であるべく定められているといえましょう。他者の声なき声に表現を与え、声を大きな力へと掲げていくことが芸術の使命です。ユネスコ憲章には「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と述べられています。この京都西山の地でともされた小さな灯が、ひとりひとりの心を媒介して、大きく広がっていくことを願います。わたしたちは、単に武力による紛争の解決を否定するだけでなく、芸術の立場から、平和な世界に向けて寛容の精神と相互理解を促進すべく努めることをここに宣言します。

2006年10月9日

京都国際会議2006開催委員会



愛と平和を祈るコンサートシリーズ 左:「ウクライナからの声と響き」オクサーナ・ステパニウック 中:「音楽を通じたの祈り」京都市立芸術大学教員・学生 右:「アラブのワード音楽の真髄～伝統と現代」ニザール・ロハナ



プレ・コンサートシリーズ「音楽による平和のかたち」



上:広河隆一写真展「平和が壊れるときーチェルノブイリ・アフガン・イラク・パレスチナより」
下:シンポジウム「音楽と平和」



ミハウルマン公開ワークショップ



上:中ハシクシゲワークショップ
下:美術学部公開シンポジウム「<他者>に開かれた場所のために」

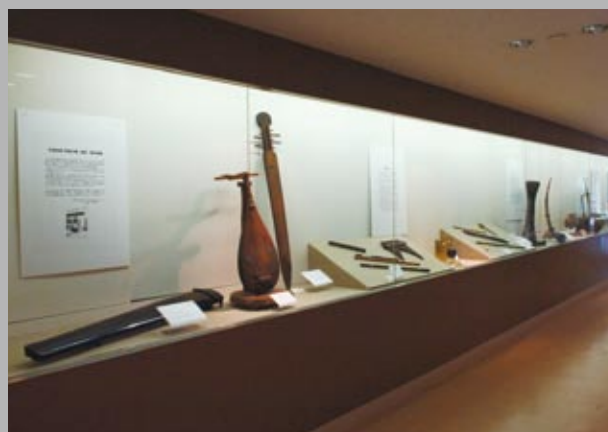
日本伝統音楽研究センター

活動概要と伝音セミナーのご紹介

日本伝統音楽研究センター（通称：伝音センター）は、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指しています。日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を解明し、その成果を公表し、社会に貢献することが主な仕事です。年度ごとにさまざまな研究テーマを設定して、国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たしています。また、京都市・芸術大学に設置される点を生かして、解説や実演とともに最新の研究成果を市民や学生にわかりやすい形で提供する、公開講座・セミナーなども学内外で開催し、高い評価を得ています。文献などの所蔵資料は、一定の範囲内で閲覧提供も行っていきます。インターネットによる情報や資料の発信にも、積極的に取り組んでいます。webやチラシで本センターのイベント情報をみかけたら、ぜひ気軽にお立ち寄りください。



伝音セミナー



日本伝統音楽研究センター所蔵 田邊コレクションの楽器



日本伝統音楽研究センター所蔵 田邊コレクションの楽器



日本伝統音楽研究センター所蔵 田邊コレクションの楽器

■日本伝統音楽を聴く「伝音セミナー」への誘い

日本伝統音楽研究センター（通称：伝音センター）には、日本の伝統音楽の録音をおさめたSPレコードが、多数所蔵されています。これらのSPレコードは、大正や昭和初期の名演奏をつたえる貴重な音源であり、そのデジタル化作業が急務であることは、現代、ひろく認識されています。当センターも、その必要性を早くから認識し、デジタル化作業に力をいれてきています。ただし、デジタル化された音源も、公開され、多くの人に聞かれなければ、存在している意味がないでしょう。そうした理由により、当センターでは2006年度から「伝音セミナー」と称する催しを始めました（第一木曜日14時から、参加無料）。「伝音セミナー」は、当センターの研究員がナビゲーターとなり、一定のテーマにしたがって、複数のSP音源を順次、紹介するという催しです。生活の変化、時代の変化により、雅楽、琵琶、箏、三味線の響き、浄瑠璃、謡曲、民謡等の声も、現代人にはなじみがうすくなっています。したがって、大正、昭和初期の名人たちの演奏も、ただ聞くだけでは理解できないことも多く、そういう落差をうめるのが、専門的な知識に裏づけられた研究員による解説とナビゲーションです。伝音セミナーでは、必要におうじ、関連する楽譜、写真、書籍の展示も適宜おこなっています。学内の教員や学生だけでなく、ひろく市民にも、貴重な音源を聞き、日本の伝統的な音楽を再評価してもらうための機会となっています。（センター准教授：藤田隆則）

美術学部／美術研究科

作品展のご紹介

京都芸大の作品展は、美術学部の1回生から4回生までと、大学院美術研究科修士課程の1・2回生の全員が出品した作品によって構成されています。この美術学部および大学院修士課程の学生が全員参加する展覧会は、毎年2月に行われています。その内容は、その目的にしたがって、大きく二つに分かれています。学部の4回生と大学院2回生の展示に関しては、それぞれ卒業作品展、修了作品展の役割を果たすものであり、1回生から3回生までと大学院1回生につきましては、日頃の教育・研鑽の成果を紹介する展示となっています。卒業作品展と修了作品展は、個々の学生の将来的活躍を期待する重要な展示ではありますが、同時に、そこに至るまでの研究・学習の道程を示す教育的展示もそれに劣らず重要なものと認識しております。実際の展示においては、両者を分離せず、専攻別の形式をとっております。展示会場は、京都市美術館本館、別館、そして京都芸大の学内展の三カ所となっており、2006年度の作品展にも一般市民の方、保護者の方など1万人近い、ご来場をいただきました。



制作風景（染織専攻）



制作風景（ビジュアルデザイン専攻）



展示準備（構想設計専攻）（京都市美術館）



展示風景（油画専攻）（学内展示）

* 美術学部・大学院の学生は、毎年、数多くのコンペで高い評価をいただいております。

・2006年度美術学部・大学院学生のおもな入賞者

●日本画

『雪舟の里 墨彩画展』優秀賞 倪玫玲（修士2回）

『春季創画展』春季展賞 井手元貴子（修士2回）

『松柏美術館花鳥画展』優秀賞受賞 佐伯千尋（博士課程満期退学）

●油画

『VOCA展』奨励賞 Robert Platt（博士3回）

●版画

『第10回浜松版画大賞展』優秀賞 芳木麻里絵（修士1回）

『第31回全国大学版画展』買い上げ賞

芳木麻里絵（修士1回）、竹内佳奈（修士1回）、野田仁美（学部4回）、土井智美（学部3回）

●造形構想

『Broadband Art & contents Award Japan 2006』映像コンテンツ部門 佳作賞 高橋三紀子（修士2回）

●ビジュアルデザイン

『第10回岡本太郎現代芸術賞』入選 田中英行（antenna）（修士2回）

『読売広告大賞』入賞 アボットマークシュン、太田憲作（学部4回）

『第16回京都広告賞』京都市長賞 平田宏志、宮本祐輔、村上恭平（学部3回）

●漆工

『タレンテ展』（ドイツ／ミュンヘン）タンレテ賞 井川健（博士2回）

●陶磁器

『第44回朝日陶芸展』グランプリ 白川真悠子（修士2回）



音楽学部／音楽研究科

オペラ公演のご紹介

音楽研究科(大学院)では、毎年オペラの公演を行っております。「響／都プロジェクト京芸ルネッサンス2006コンサートシリーズ」と銘打って、学部・大学院の様々な演奏会が企画されましたが、その中の「グランドコンサートシリーズ京都市立芸術大学大学院第22回オペラ公演」として、英国バロックオペラの傑作でカルタゴの女王ディドとトロイヤの名将エネアスの悲恋の逸話を描いた「ディドとエネアス」と、アイルランド・アラン諸島で暮らす人々の生活を叙情的に描いた「海に騎りゆく者たち」の2作品を、若き声楽家たちが力いっぱい演じました。毎年大いに人気を博しているこのオペラ公演は、合唱や助演、舞台制作全般に渡って、学部生も積極的に参加しています。今回の公演も大変盛況で、ご来場いただいた方々に高い評価をいただきました。



「ディドとエネアス」



「ディドとエネアス」



「海に騎りゆく者たち」



「海に騎りゆく者たち」

* 音楽学部・大学院の学生は、近年、数多くのコンクールにおいて、輝かしい成果を上げております。

・2006年度音楽学部・大学院学生のおもな入賞者

●作曲専攻

第75回日本音楽コンクール 第1位 山根明季子(修士2回)

●ピアノ専攻

第75回日本音楽コンクール 第1位 河内仁志(学部4回)

●弦楽専攻

第1回宗次エンジェル・バイオリン・コンクール 第6位 東珠子(学部1回)

●管打楽専攻

第4回済州プラスコンペティショントランペット部門 第2位(1位なし)

菊本和昭(平成16年度修士課程修了)

青山音楽新人賞 菊本和昭(平成16年度修士課程修了)

●声楽専攻

友愛ドイツ歌曲コンクール 第1位 八木寿子(修士課程修了)

第13回日本モーツァルト音楽コンクール 第3位 満洲悠理(学部2回)

第60回全日本学生音楽コンクール 第3位 田中奈津美(学部3回)



京都Neo西山文化プロジェクト

京大・日文研との共同地域貢献事業のご紹介

京都は平安の時代より国風文化を育んできましたが、室町時代には北山・東山の地を中心として公家・武家・禅宗の文化を融合させつつ、豊かな文化を開花させる中で、和風庭園、書院造り和室、茶の湯、生け花、能楽、連歌・俳諧、彫金、蒔絵などといった、今日の日本文化の原型とされるものを数多く生み出してきました。京都Neo西山文化プロジェクトは、京都西山地区に位置する京都大学国際イノベーション機構(IIO)、国際日本文化研究センター(日文研)伝統文化芸術プロジェクト、京都市立芸術大学(京都芸大)の三機関が連携し、科学技術・文化・芸術が融合した新しい21世紀の文化を創出していくことを目的として活動しています。2006年度は、プロジェクトの一環として、「京都ネオ西山文化フォーラム」を開催いたしました。2007年以降も継続して、京都を中心として日本社会に継承され蓄積されてきた伝統文化・技芸に関わる各種資源と、現代アート、現代の先端ハイテクとの融合の可能性を模索した様々な企画を推進する予定です。



「新文化創成シンポジウムと五山送り火鑑賞会」



「竹の魅力、その未来。」



学生によるインスタレーション



「竹を使ったあかり」展

アクアプロジェクト @KCUA project とは、京都市立芸術大学の三つの機関、美術学部・音楽学部・日本伝統音楽研究センターが連携して、ユニークな芸術研究・教育の一端を地域社会に開いていく試みです。大学の英語表記 "Kyoto City University of Arts" の頭文字をもじった"@KCUA"は、音読みするとラテン語の「アクア=水」。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理想を表現しています。アクアプロジェクトは、毎年、レクチャーやワークショップ、展覧会やコンサートなどを開催し、学生だけでなく、広く地域の皆様にも参加いただきながら、伝統と現代、芸術と社会のより豊かな関係を探っていきます。アクアプロジェクトはまた、「京都ネオ西山文化プロジェクト」とも結びついています。2006年度は2回のフォーラムにおいて、学生によるペインティングや音のインスタレーション、新素材開発と連携した展覧会などを行いました。

アクアプロジェクト

京都芸大独自の地域貢献事業のご紹介



ミハウルマン公開ワークショップ

発行元：京都市立芸術大学全学広報委員会 〒610-1197京都市西京区大枝沓掛町13-6 TEL075-334-2200

京都市印刷物第193020号

